

JICA発！「人間的なお産」の取り組み 質の高い母子保健ケア実現のために大切なこと

1996



ブラジル

医療従事者の
“内的な変革”

寄り添い、支えるケアへ



権威的態度から傾聴へ



日本の助産師が大切にしてきた
助産の本質の共有

2004



ボリビア

参加型研修を通じ、
自分が優しくされたり尊重される体験は
医療者従事者の内的な変化に
つながります

2006



アルメニア

「人間的なお産」体験
を支える環境の整備

女性が尊重され
安全で安心な環境づくり



“小さな”機材供与や
プライバシーの尊重による
ケアの改善

2004



カンボジア

新しい命を迎える場所を
温かく優しいものにし
お母さんが産む力を
発揮できるようにします

2009



セネガル

2017



エルサル
バドル

2015



タンザニア

2010



マダガスカル

「人間的なお産」とは 何ですか？



Photo: Sakae Kikuchi

お母さんには産む力があり、赤ちゃんには生まれてくる力があります。女性は、妊娠、出産を通じて、自分では気づいていなかった力に気づいていきます。「人間的なお産」は、お母さんと赤ちゃんが最大限に、自らの力を発揮できるようになることを目指すとりくみであり、本来の意味での「潜在能力(capability)開発」です。

①

女性が尊厳を持って扱われ、より優しくされる。そういうケアを通じて、女性はより力を発揮できるようになり、そのようなケアは、ケアを受ける女性だけではなく、ケアを提供する方もまた、自らの能力を開発させ、力づけられます。これこそが、相互のエンパワーメント、という経験でしょう。こういうプロセスこそを、「人間的なお産」と呼んできました。

②

JICAは1990年代から、一貫して、「人間的なお産」を推進してきました。近年になってWHOも妊娠、出産に関わる分野でRespectful careやPeople centered careなどに言及するようになりましたが、JICAはすでに四半世紀前から、「人間的なお産」ということばで、この分野の重要性を指摘してきました

③

1996年のブラジルでのプロジェクトを始まりとして、ボリビア、アルメニア、マダガスカル、セネガル、カンボジア、ベナンで「人間的なお産」のプロジェクトを行ってきました。現在もエルサルバドル、アンゴラ、コートジボアールで、同様の取り組みが進んでいます。JICAは、世界に先駆ける形で、多くの経験を積んできたのです。

④



Photo: Sakae Kikuchi

「人間的なお産」は世界中で行われている「妊娠婦死亡率の低下」、「周産期死亡率の低下」をめざす緊急産科ケアのとりくみを補完し、すべての女性の関わる母性保健の枠組みをよりよくする重要なイニシアチブです。

⑤

なぜ「人間的なお産」 というのですか？

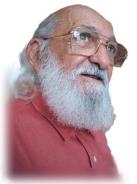


Photo: Sakae Kikuchi

「人間的なお産」という言い方をたどっていくと、ブラジル人教育家パウロ・フレイレの、尊厳や主体性を奪われた人々がそれを取り戻す過程を「人間化(ヒューマニゼーション)」といったり、置かれた状況を「意識化」する、といった思想にたどり着きます。

①

パウロ・フレイレ
(1921年～1997年)
ブラジル北東部ペルナンブコ州に生まれる。
教育学者、哲学者。
「意識化」「問題解決型教育」などを通じ、
20世紀の教育思想から民主政治のあり方にまで
大きな影響を与えた。
その実践を通じて「エンパワーメント」
「ヒューマニゼーション(人間化)」という表現も
広く知られるようになる



パウロ・フレイレの思想を学ぶためには
「被抑圧者の教育学」という本が有名で、保健
医療のみならず、開発、国際協力に関わる世
界中の人々から大切にされている本です。
この本でヒューマニゼーションの概念が語ら
れています。

②



お産の場で考えてみましょう。

出産する女性が、支援されるべき場所で、尊
厳を無視された扱いをされる、科学的根拠の
ない不適切な医療介入を受けて心や身体が不
必要に傷つく、逆に必要な時に適切なケアが
受けられない…。

このような「非人間的」なお産の状況が世界
中で起こっています。
なぜこのようになっているかを「意識化」し、
お産の場を女性の尊厳や主体性を尊重する「人
間的」なものとしていきたい。JICAの「人間
的なお産」「出生と出産のヒューマニゼーシ
ョン」はそれを目指しています。

③



WHOの「正常産のガイドライン(Care in Normal Birth: a practical guide, 1996)」は
「人間的なお産」の科学的根拠を示すものです。
現在は、改訂版(WHO recommendations:
Intrapartum care for a positive childbirth
experience, 2018)がでています。

④

「人間的なお産」を支える

人材育成



医療従事者の内的な変革

研修を通して、自分が優しくされたり尊重される経験は、医療従事者の内面的な変化につながりやすくなります。

医療従事者は分娩の異常を発見し、分娩を管理する存在というだけでなく、お母さんの産む力、赤ちゃんの生まれる力を最大化するための存在となっていきます。



権威的態度から傾聴へ



医療の現場では、社会的立場が高い医療従事者が、無意識的に権威的態度をとってしまいがち。「傾聴」を体験する学習を通じ、プロセスを意識して、ケアの姿勢を学びます。対話し、傾聴し、グループの中で、自分を活かし、他者を活かすことで、ケアの本質が見えてきます。

情緒的・身体的に寄り添い支えるケアへ



Photo: Sakae Kikuchi

医療者からお母さんと赤ちゃんへの尊重、お母さんからの医療者への信頼といった双方向性の関係がベースとなります。

参加型研修の実施

研修は、お互いの成長を感じ、実践のヒントを得る機会。Training of Trainers (TOT) は、回数を重ねることで、参加者の変革を起こす Training of Transformation へつながります。同じメンバーで定期的に集まれる工夫があると継続的にお互いを励ましあうこともできます。



ベースとなる知識・技術の獲得

お母さんと赤ちゃんの2つの命を守るために、解剖生理やお産の進行の理解は必須です。医療者としての態度や姿勢は、深い知識に裏付けられ、出産という場の安全と豊穣を導きます。

名前の入っていない写真は JICA 報告書より

「人間的なお産」体験を支える

環境整備



安全性と快適性

新しい命を迎える場所は暖かく優しいものであってほしい。出産の場における安全性と快適性は、並立、共存し、影響を与えあいます。

産婦が力を発揮できる環境づくり

自分が選んだ人による付き添い、カーテンなどによるプライバシーの保護、医療者からの尊重されたケアはお母さんの出産満足度を高め、緊張がほぐれることで、お産が進みやすくなります。

目に見える形で出産の形が変わるので、カーテンをつけて部屋を区切るだけでも、医療者へのデモンストレーション効果があります。



「小さな機材」



赤ちゃんの心音確認のためのトラウベやドッپラー、お母さんのバイタルサイン測定のための体温計や血圧計、臍帯を切る清潔なハサミ。自由な体位のためのマット、クッションや分娩椅子、ポスターやフリップチャート…。小さな機材供与はプロジェクトのシンボルとなり、ケアの改善にもつながります。

5S-KAIZEN

5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）

-KAIZENは日本が誇るアプローチ。業務環境改善できれいな職場や、空間の確保という印象を持たれます。その実践の本質は、意識の変革や自立した職場のマネジメントにあります。



助産ケア

物理的な環境だけでなく、医療者の姿勢や言動も、出産に影響を及ぼす環境の一つです。助産師は、お母さんの声を聴き、表情を見て、体に触れて、分娩進行を的確に予測し支えることを目指します。

名前の入っていない写真は JICA 報告書より